

# 住まいと「杜の都」

仙台市博物館 学芸企画室 中武 敏彦

第16回

私たちが暮らす仙台市は、「杜の都」の愛称で全国的に知られています。暮らし編の最終回は、暮らしに欠かせない住まいが、「杜の都」の成り立ちや市の都市政策と密接に関係していたことを紹介します。

## 「杜の都」のルーツ

江戸時代の仙台城下には多くの武家屋敷があり、城下町の総面積の半数以上を占めていました。武家屋敷の面積は、拝領した土地の石高などで決められており、中級の藩士でも四〇〇坪以上と、広い敷地を有していました。初代仙台藩主・伊達政宗が家臣に屋敷内の植林を奨励したこともあり、武家屋敷の庭には木材となるスギやヒノキ、食用となるカキ・ウメ・クワなど多種多様な樹木が植えられました。明治時代になると、広大な敷地を持つ武家屋敷は官公庁や学校、公園などに姿を変えたものもありましたが、それでも多くの武家屋敷が市街地に残っていました。そのため、仙台北城跡や愛宕山（太白区向山）などの高所から市街地を眺めると、東北随一の都市でありながら、城下周辺の丘陵地帯の緑、寺社の緑、さらに市街地の武家屋敷の緑が連なる景観を見ることが

できました。そのため、仙台市は「杜の都」と呼ばれるようになりました。

## 都市政策の目標となった「杜の都」

昭和二〇年（一九四五）七月の仙台空襲で市街地の大半が焼失し、江戸時代から続いた「杜の都」の景観は失われました。戦災復興事業では青葉通や広瀬通などが新設され、ケヤキなどの街路樹が植えられました。これらの街路樹が成長し、現在の「杜の都」の景観を生み出しました。昭和三〇年代後半からの高度経済成長期になると、市街地近郊でも山を削って大規模な住宅団地が開発され、次々と緑が消えて行きました。そこで緑の保護と育成を目的に、仙台市は昭和四八年（一九七三）、「杜の都の環境をつくる条例」を制定しました。市が条例を定めたことで、「杜の都」は単なる愛称にとどまらず、都市政策の目標となることとして、象徴的に使用されるようになりました。先月一八日に閉幕した全国都市緑化仙台フェアも、仙台開催を誘致した理由の一つに、今年が条例制定五〇周年という節目の年にあたることあげられます。

## 碑が伝える住まい

今回の緑化フェアでメイン会場となった青葉山公園追廻地区には、今年四月「杜の都・仙台」をPRする拠点施設として、「仙臺緑彩館」が開館しました。敷地の一角には、「追廻住宅ふるさと」の碑が建っています。

江戸時代の追廻は藩の馬場や武家屋敷明治時代以降は陸軍の練兵場として使用されてきました。追廻が住宅地となったのは、戦後の昭和二二年のことでした。国の住宅営団によって、仙台空襲の被災者や海外からの引き揚げ者のための住宅が建てられ、翌年には約六〇〇世帯・三〇〇〇人が入居しました。

一方、追廻を緑地公園として整備することを計画していた仙台市は、移転について住民と長い話し合いを重ねてきました。碑の存在は、この地に多くの住民が暮らしていたことを、今後も伝え続けるでしょう。



仙台北城跡から撮影した追廻住宅（手前）  
昭和30年代 仙台市博物館蔵

次号からは新コーナー「のぞいてみよう！せんだいの歴史～伊達騒動編～」がスタートします。

## 発売中！ 仙台市史 全32巻

原始から平成元年までの仙台の歴史をわかりやすく紹介！

「通史編」のほか、古代から現代までの歴史資料で構成される「資料編」、特定のテーマを詳しく掘り下げた「特別編」、「年表・索引」があります。

### ピックアップ紹介

## 通史編8現代1・通史編9現代2

A5判/オールカラー 各巻3,143円(税込)

「杜の都」と呼ばれた仙台市の、終戦から平成元年までの歴史を紹介。戦災復興から政令指定都市までの歩みを、市政・産業・文化など多方面から解説しています。



既刊紹介や購入方法は博物館ホームページでご案内しています。

仙台市博物館 SENDAI CITY MUSEUM

▶博物館ホームページ  
▶博物館ツイッター

仙台市博物館 検索 @sendai\_shihaku

▶お問い合わせ 〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台北城三の丸跡)  
TEL:022-225-3074 8:30-17:15 ※土・日・祝休日・年末年始(12/28~1/3)を除く

※当館は現在、大規模改修工事のため休館しています。令和6年4月に再開予定です。